

藤村の新時代意識と『春』

はじめに

明治政府は日露戦後の経営戦略に、軍事・産業基盤の拡充、植民地統治などの主要な諸施策を策定する一方で、明治四十一年十月十三日には「戊申詔書」を發布し、戦後経営の遂行に不可欠な国民意識の国家主義的な糾合を強化した。「新聞紙法」(明42・5・6)の公布や「文芸委員会」設立の画策も、戦後尖鋭化する思想・文学への対処に苦慮していたことを物語っている。既に岡義武氏が「日露戦争後における新しい世代の成長(上)・(下)」「思想」(昭42・2、3)において、政治史的に新しい世代の思想傾向を詳細に跡付け、平岡敏夫氏の『日露戦後文学の研究上』(有精堂出版 昭60・5)の序説「日露戦争以後思想界の浮華動揺」にも、日露戦後の思想状況の確な概観が行なわれているが、要するに戦後経営に腐心する政府は、日露戦後顕著になった青年層の個人主義的な言動に強い懸念を抱いていたのである。明治三十九年六月九日、文部大臣牧野伸顕が学校当局者に発令した「学生思想風紀取締に関する訓示」をきっかけに、訓示への賛否や、煩悶する青年の救済策をめぐる論議が賑々しく沸騰したこともよく知られている。藤村は、悪傾向の烙印を打たれた青年への憂慮や批判の論調を肯定的判断に転倒することを試み、そこに時代を画する指標的意義を見出そうとしたのである。以下、小説『春』(明41・11)において自身の青春期を俎上にのぼそうとした藤村が、日露戦後の青年とそれを取り巻く状況にどの様に対峙しようとしていたかについて考察してみたい。

(一)

エッセイ「批評」(原題「批評について」)、「新潮」(明42・3)は、藤村の戦後の時代認識を察知するにたる重要資料である。日露戦後の様々な問題を列挙しながら、それらが時代を考察する根本的な課題であるゆえんについて、藤村は次のように述べている。

一般の社会から言つて見ると、日露戦争など云ふ大なる意味のあ

瓜 生 清

(平成十年八月三十一日受理)

ること、存外簡単なことに解釈されて居るし、現代の青年に色々煩悶があると云ふことも、割合に単純なことに思はれて居るし、其間に色々思想界の方で苦闘して敗れ斃れた人々のあることも、それ程深くは省みられて居ないし、また例えば明治の学者や詩人が二十代か三十代で多く死んで居るなどと云ふことも、そんなに深い注意を惹かないし、それから教育事業に従事する人達も、色々世の中に複雑した現象が起つても、それを極く単純なことに考へて居ると云ふ風で、いろんな点から考へて見て、充り現代の日本と云ふものが、未だ充分に解釈されて居ないやうに思へる。

いかにも『春』において〈移動の時代〉を彷徨する青春群像を追究しようとした藤村らしい当代意識が述べられている。『春』刊行前後の藤村が、時代の趨勢に注視を怠らない文明批評家的意識の持ち主であったことは、「市区改正」の最中にある東京の市街を背景に、激変して止まない「新しい時代」の中で目標を喪失した知識人の焦燥感を描いた小説「並木」(『文芸倶楽部』明40・6)、軍事・実業・教育・風俗に多大な影響を及ぼした日露戦争が時代を画する大事件であったことを述べた「昨日午前の日記」(『国民新聞』明42・10・2)等の資料で容易に証明することができる。藤村は、日露戦争が国民意識に与えた影響を、「現代の日本に対する解釈」(前掲「批評」)を目下の最重要懸案であると認識する時期の到来、つまり、欧米を範として近代化を急いだ我が国の思想の在り方、文明の行方について内省する好機であると判断していたのである。

エッセイ「批評」の引用文中で注意を喚起している天折した思想家・文学者は、大西祝・北村透谷・国木田独歩等を念頭に置いたものである。藤村が、なかでも畏友透谷について「新時代の先駆者」(北村透谷の短

き一生、「文章世界」大元・10)という表現で追慕したことは周知の事実である。しばしば透谷の思想が後代を領導する先見性に満ちていたことに言及した藤村であるが、興味ある事柄は、日露戦後に新旧の世代的な対立が激化した状況を、しばしば「新時代」という語句で説明しようとしていることである。例えば、「新時代」の中で「動揺」する人間を、墮落の「真相」から探究することに多大な意義があると説いている談話「女は如何なるハツミにて墮落するか」への回答(『新古文林』明39・10)を始めとして、小島烏水著『山水無尽蔵』「序」(隆文館明39・7)に「新時代」、エッセイ「文学断片」(『基督教世界』明42・7)「女子と修養」(『新片町より』左久良書房明42・9)にも、「新しい時代」「処女時代」「新しい日本」等の時世認識を示す語句が見出される。

日露戦後を「新時代」の到来とみる理解の仕方は、『破戒』(明39・3)刊行後、文壇が一挙に新旧交代の大変動期に突入した情勢判断と無関係であったはずがない。明治四十年七月二十六日付けの神津猛宛書簡に「甚だ心安く『春』の長き物語に従事致居候。」と告げた後、『春』の創作に専心する意欲を以下のように力強く述べている。「宜しく小生等は架空の論議を避け、深き根底を作物の上に築き、所謂『若き日本』の為に多少の貢献を為すべくに候。」これによると、藤村は『春』において明治の初期浪漫主義を招来させた雑誌「文学界」時代を回顧的に物語ろうとしたのではなく、日露戦後の時代認識に深く関与した創作を志そうとしていたことになる。ハーヴァード大学のイエチン図書館の「日中文庫」を調査した尾形国治氏は、明治四十一年十二月、藤村がゼエムス・カアルトン・ヤングという米国在住の人物に『春』を献呈した際に書き添えた英文の献辞を紹介している。^(注1)この献辞によると、『春』は、A story-a study of young Japanese life であつたのであり、上記神津

宛書簡の「若き日本」という新時代意識と、『春』の意図が共鳴する関係にあったことを示唆している。「若き日本」という戦後意識の内実と、『春』の表現世界は一体どの様な関係にあったのであるうか。献辞に記された文面によると、藤村は『春』に群像の生・恋愛・夢だけでなく、“their struggle”⁽¹⁾をスタディしていたのであり、『春』の世界と、前記「批評」において「現代の日本に対する解釈」に不可避な課題に挙げた「現代の青年に色々煩悶がある」という指摘とは、表裏一体の関係にあったことになろう。

藤村は、戦後一挙に社会問題となった青年の煩悶や墮落にしばしば言及している。関連する資料を発表順に列挙すると、つぎの通りである。前掲『女は如何なるハツミにて墮落するか』への回答「婦人の墮落に就いて」^(注2)（「婦人画報」明40・5）「放浪者」（「文章世界」明41・9）前掲「批評」（明42・3）「放浪者」（「文章世界」明42・4）「煩悶者」（「文章世界」明42・4）「健全、不健全」（「新片町より」所収）「発売禁止」（同上）。以下、これらの諸資料が、小説『春』を挟んで、青年の煩悶を冷静に分析する論調から積極的に擁護する立場へ変化していることを概観する。

「女は如何なるハツミにて墮落するか」への回答^(注3)は、有島生馬が短編集『緑葉集』（春陽堂 明40・1）を一貫する主題について「嫉妬」の文学^(注4)であると論評して以来、瀬沼茂樹氏^(注5)によって藤村の女性不信と関連付けられている資料である。妻への疑惑が女の墮落を考察させる端緒となったことを否定する訳ではないが、回答文が、墮落の種々相を広く時代・社会的要因にまで拡大して探究しようとしているのを看過してはならない。明治三十九年六月九日、文部大臣牧野伸顕は、学生思想・風紀の弛緩を憂慮し、将来国家の秩序を揺るがす禍根となるのを未然に

防止するために、学校当局者に嚴重に取り締まるよう訓令したことは既に述べた。この訓令を契機に、雑誌「新公論」は七月から九月にかけて「如何にして衰世の悪傾向を防止すべき歟」という物々しい特集名で、識者の防止策を連続して掲載した。一方、「早稲田文学」も十月号で諸家から聴取した「文相訓令に対する意見」の特集を組み批判的立場を明確にしたのを始めとして、甲論乙駁の論議が巻き起こった。前記の藤村の談話が掲載された「新古文林」の主宰者国木田独歩もこの訓令を強く意識した一人であり、社会の耳目が集中している問題を雑誌の「呼物」として取り上げようとし、配下の窪田空穂等に「材料を集」めるよう命じていたのである。^(注6)「新古文林」の記者が取材のために藤村を訪ねた背景には、以上のような経緯があったのである。藤村も、雑誌「新古文林」の取材目的について「記者が女子の墮落といふ問題を提出されたのは、恐らく今の女学生問題に關してのこととせう」と述べ、直接明言していないが、文相の訓令に端を発し、以後騒然たる議論があったことを強く意識している。勿論、エッセイ「当代の青年は何故に精神的方面に於て織弱なる乎」（「世界的青年」明39・12）で、現代青年に手厳しい注文を出していた国木田独歩と藤村との間では、認識の落差が大きい。墮落問題が煽情的な論争に矮小化されることを危惧した藤村は、複雑な要因が絡む女の墮落の局面に、旧来の道徳を杓子定規に当てはめて逸脱を非難する愚を避けようとしている。モラルが動揺している過渡期においては、むしろ新しい価値感の芽生えである場合もあり得るからである。

ところが、『春』刊行後に発表された「煩悶者」「批評」「放浪者」「健全、不健全」「発売禁止」などの一連のエッセイは、煩悶する青年に対して、同情を惜しまない積極果敢な擁護者を自ら標榜している感があるのである。自然主義文学を中心とする新文学を忌避した明治政府は、文

学界の懐柔を目論み「文芸委員会」の設立を執拗に画策した。エッセイ「発売禁止」は、「文芸委員会」設立の動きに対して終始警戒の構えを崩さなかった藤村の在野的抵抗精神を裏付ける資料である。「発売禁止」が何時書かれたかは未詳である。本文中で、小栗風葉の小説「姉の妹」〔中央公論〕明42・6の発禁処分につれた「中央公論」(明42・7)の特集「姉の妹」の発売禁止に対する諸名家の意見」に言及しているので、少なくとも七月以降に書かれたことははっきりしている。「発売禁止」は、社会の安寧秩序を大義名分にして、妄りに発禁処分を繰り返す暴挙を語気強く非難し、以下のように内務省当局者に猛省を促そうとしている。「善政を行はうとするものは時代の精神を知らねばならぬ。それには、青年の心をも読まねばならぬ。一概に今日の青年を侮り、文学を墮落せりと為し、誤れる社会の報告を信ずるがごときことは、吾儕は当局者の為に執らぬ。」当局者の理解に欠如している「時代の精神」の内実とは何か。世代的先行者である藤村は、なぜ後続の「青年の心」に対して同伴者の意識を吐露しなければならなかったのか。その真意を理解する上で参考になるのは、「姉の妹」の発禁事件の一ヶ月前に発表されたエッセイ「ルウソオの『懺悔』中に見出したる自己」〔秀才文壇〕明42・5であろう。藤村はここで、自己を確立するまでに費やされた青春期の煩悶を回想し、自己覚醒を促したルソー『告白録』との出会いによって、一切の束縛を離れて「生」に徹する自由な精神と様々な抑圧に抗する個人の積極的な解放を、「近代人の考へ方」の必須の要件であると示唆されたのである。透谷の自殺、長兄島崎秀雄の入獄等、多難な明治二十七年を回想したこの周知の文章は、明治四十二年の藤村が、自己の思想形成史の原点を明確に措定しようとしたものである。エッセイ「発売禁止」に出てくる「時代の精神」の語義は、この思想の延長線上

にあり、「近代人の考へ方」に不可欠な自由な精神と個人の積極的な解放を、時代の趨勢であると認定する見解に直結していたはずである。藤村は、「青年の心」の志向の中に、自己の思想と同質のものが発現していると考えていたのである。

旧世代の識者は、現今の青年の軟弱を慨嘆しては、修養の必要を力説する訓戒をしきりに垂れていた。このような風潮に鑑みると、「青年は老人の書を閉じて、先づ青年の書を読むべきである。」というエッセイ「青年の書」(『新片町より』所収)は、新しい世代は青年の意気と情熱に真摯であれ、と檄を飛ばそうとした藤村のエールであったと解してもよいのである。同様に、エッセイ「健全、不健全」の「所謂健全は、其実極めて不健全なことがある。所謂不健全は、其実極めて健全なことがある。」という反語的表現は、新旧の価値観が激しくせめぎ合う時代状況の説明に止まるまい。前記「北村透谷の短き一生」において「文学界の先づ受けた非難は、不健全といふ事であつた。それに対しても吾々若いものは皆激しい意気込を持つてゐたから、北村君などは『どうも世間の奴等は不健全で可かん』とあべこべに健全を以て任ずる人達を、罵るほどの意気で立つてゐた。」という周知の回想に遡行できることも間違いないまい。『春』において、青春群像の苦悩を「新時代」の精神の先駆けであるという意味付けようとする時、かつて社会が押しつけた「不健全」という苦いレッテルは、現在の「新時代」に繋がる「健全」に評価を逆転させることが可能になるのである。すなわち、藤村は、新しい世代に顕著な煩悶は、一切の倫理・道徳観が転倒させられた過渡期を証明する現象であり、新しい価値の創造に向かう生みの苦しみであると肯定的に判定しているのである。

以上のように、明治三十九年「女は如何なるハツミにて墮落するか」

への回答」において、女学生問題についての過剰な反応を廃し、冷静に問題の本質を探究する論調から、『春』の刊行を間に挟んで、明治四十二年の「煩悶者」「健全、不健全」「発売禁止」等に至って、真摯な青年の煩悶に対する同情者として無理解な社会に抗弁する立場へ変化している。この論調の質的变化の原因は、『春』の成立過程が、青年の煩悶に積極的な指標的価値が内包されているという見解を固めさせていったためと考えられるのである。

(11)

藤村が青年の現状を肯定的に評価する契機は、文相の訓令をきっかけに鮮明になった新旧の世代間の思想的相剋や、雑誌「文学界」時代を体験する『春』の構想の進捗以外にもあった。例えば、藤村が後見的に側面から助成した第二次「新思潮」の同人に、木村荘太・大貫晶川がいる。なかでも木村は、明治三十九年十月二日浅草新片町転居後の藤村に最も私淑した青年の一人である。明治四十二年当時、藤村は数えの三十八歳、木村は二十一歳である。『春』に対象化されようとした藤村の「文学界」時代は、二十一歳から二十五歳までであり、木村は若き日の藤村とほぼ同年齢であった。木村は異母妹との恋の苦悩、圧政的な権力者である父への反発、複雑な家族の人間関係などに苦しみ、頹廢的なデカダンスの中に青春を彷徨していた。木村は、まさしく前記「煩悶者」等の一連のエッセイの内容に合致した典型的な人物であったのである。木村は渡欧する藤村に送った送別の文章「新片町を去る著者に」（『後の新片町より』新潮社 大2・4）の中で、藤村から受けた厚誼に対して、次のような熱烈な謝辞を述べている。「こゝに私は申します。烈しい情

の激動と、重く圧碎して来た苦境と、これに伴ふ狂暴な絶望の中に、僅かにそれを濡ほすあなたの愛に逢ふ事を得て、漸く自身の痴愚と惑溺と動揺と喪心の果に危く墜り掛けた半生の荒廢を免かれた者はいふ私でした。」二人の交友は、先行者藤村と日露戦後の新しい世代との間に成立した濃やかな精神的共鳴を示している。同時に、この交際は親密な師弟関係に止まらず、藤村が煩悶する時代の青年を同情的な立場から鼓舞し激励した一連のエッセイと通底している。いわば、常時身辺に接触して来た木村の存在は、時代の子として苦しむ青年の内面に藤村が注目していく最も身近な媒体となったのである。

日記風のエッセイ「浅草にて」（『文章世界』明42・8）の記述によると、明治四十二年六月二十六日に開催された龍土会に木村を同道したことが記されているように、この年は木村との交渉が最も親密さを加えた時期である。「浅草にて」の七月一日のくだりは、冒頭信州在のバトロン神津猛が「報徳会の事業に全力を傾けて」挺身していることから書き始められている。雑誌「新民」（明39・6）に載せられた無署名の「北信の報徳事業」によると、既に明治三十年代後半から北信地方における報徳社の活動は活発化し、支部の結社が相次いでいたことが明らかである。筑摩書房版『藤村全集』別巻に収録されている『神津猛日記』の明治四十年七月十日の記事には「八時銀行へ出勤。仕事の合間に当家の二宮翁^{じゅう}仕方興復始末などを調べる。」とある。この日記や神津猛の遺稿集『後凋』のエッセイによると、佐久地方屈指の豪農である神津家は、過去に二宮尊徳の財政再建の「仕法」を受けていたらしい。『後凋』所収の「神津猛・てう年譜」は、明治四十年に関して「八月、報徳会夏期講演会に出席。」と記しているように、神津は、明治四十年から報徳会の活動に積極的に関わるようになり、明治四十一年、二年は農村開発のため

の識者の招聘、講演会の開催、各地での結社の育成等に尽瘁し寧日なき状態であったのである。

宮地正人^{（注）}氏の『日露戦後政治史の研究』に指摘されているように、内務省の支援の下に拡大した報徳会の活動は、日露戦後の国民意識の統合を推進する組織・団体として評価され、そこで強調された至誠・勤儉・分度・推譲は、国民の国家主義的一体化をもくろむ政府の戦後政策を補完する有効なスローガンと見なされたのである。藤村が報徳会の運動、それに強く関与していった神津猛についてどのように考えていたかは、前記「浅草にて」や神津宛書簡でも触れる所は断片的で明確ではない。

「浅草にて」の七月一日のくだりは、冒頭で神津が「報徳会の事業」に力を傾注しようとしていることに触れた後、地方の無名の読者M君の兄の私信を紹介している。それによると、現在病を得て大学を退き病床で死を待つしかない青年は、高等学校時代、小説『春』の青木によく似た無二の親友に感化されて文学を好むようになり、その友人は「自分の天職は世の弱者の為に強者と戦ふにあり」という軒昂とした所信を持っていたと語っている。藤村は、前途を閉ざされた読者の私信に同情を禁じ得ないと結んでいる。「浅草にて」の七月一日の冒頭と結びが、神津の地方改良運動と藤村の地方の青年読者との関わり方を対照させた叙述は意図的である。ここから藤村の真意を推測することが出来るのではないか。

神津の報徳会についての関与の実態は明らかではないが、各地に結社を拡大する活動に奔走していることから、日露戦後の思想的再編成を補完する運動に対して批判的な目を持っていたとは思われない。徳目として強調された至誠・勤儉・分度・推譲の精神が、地主階級の農村支配体制の温存を前提として計られた改良運動である限り、最初から問題の本

質は多く隠蔽されてしまう危険性を持っている。また、藤村の「新時代」意識を持ち出すまでもなく、その運動が内務省の国家主義的国民意識の統合の方向性を探る点において、藤村が賛同を惜しまないものであったとは考えられない。藤村は、神津の情熱が対社会的善意から出発していることまで否定していた訳ではあるまいが、日露戦後の政治的思惑に寄与していくことには警戒的であったであろう。

ここで、再度明治四十年七月二十六日付け神津猛宛書簡のなかで、『春』の準備に余念のない近況を報じながら、創作に懸ける強い信念を「所謂『若き日本』の為に多少の貢献を為す」と伝えていた文面の真意に触れておこう。藤村は、明治四十年六月二十日過ぎに神津宅を訪問し二十八日に帰京している。既に述べたように、神津の報徳会への関心は突如生まれた訳ではなかった。神津は、明治四十年七月十日の日記で、神津家がかつて二宮尊徳から受けた「仕法」の文書、つまり財政再建の記録に目を通そうとしていたので、報徳会への関心はかなり前に遡ると考えるのが穏当であろう。そうすると、藤村は神津家に滞在中、神津から報徳会の活動について直接所信を聞く機会があったのではないかと推測される。農村の更生と思想善導に係わろうと決意した神津は、藤村に日露戦後に対処する思想的立場を明確に表明したこととなるのである。そのことは、結果として、藤村に戦後の状況を自覚的に考察させる媒体となったであろう。以上のような推論を総合すると、藤村は地方改良運動に助力しようとしている神津とは全く異なる立場から、七月二十六日の書簡で「所謂『若き日本』の為に多少の貢献を為すべきに候。」と返書を送ったのではなからうか。

(三)

雑誌「文学界」時代の年譜的事項を確認しておこう。藤村は、明治二十六年一月、「文学界」創刊直後に西下、関西漂泊の旅に出る。七月、約半年の旅を仕上げ上京するが、その後も鎌倉の円覚寺、一ノ関の素封家等を転々とする。十一月、恩人吉村忠道宅に戻った後、長兄島崎秀雄の家族と同居する。以上のような一年近い不安定な一所不住の漂泊を、『春』においてどのように意味付けるかという問題が意識されなかったはずはない。藤村にとって、自己の青春の〈放浪記〉を描くことは、身辺にいた木村莊太らの青年の「煩悶」や、時代の憂慮すべき問題として「学生思想風紀」を取り締まるべきであるとする論議と没交渉に処理できるはずもなかったのである。

『春』の準備に忙殺されていた明治四十年十一月二十五日、洋行する旧友上田敏の送別会が与謝野寛の肝煎りで上野の精養軒で開かれた。参会した顔触れは、旧「文学界」の同人であった藤村・馬場孤蝶を始めとして、夏目漱石・森鷗外等五、六十名であったという。藤村は明治四十年九月「文章世界」に発表したエッセイ「放浪者」において、「夏目さんの『坑夫』のモデルになった人があつて、其人が自分の身上を話しに行ったといふことを、上田敏さんの送別会の時に聞いた」と記している。漱石は、談話「『坑夫』の作意と自然派伝奇派の交渉」（『文章世界』明41・4）において、丁度「上田敏君が暇乞に来てごたく／＼してゐた」時、この青年が面会に来たので、再度夜に訪ねさせ、三時間程来歴について聞いたと言っている。その時の身の上に関する「個人の事情」は「主に坑夫になる前の話だった」という。しかし、前記「放浪者」や漱石の談話に徴しても、藤村が送別会の席で聞き得た話の内容の詳細は不

明である。青柳達雄^(注10)氏は、明治四十一年八月十九日「東京日日新聞」に掲載された『坑夫』のモデルのゴシップ記事を紹介している。新聞の見出し「小説坑夫の主人公 煩悶慰安所に飛込む」という記事の伝える所によると、「女学生と恋に落ち」た青年は、その相手が心変わりしたために苦悶し、足尾銅山の坑夫になる前、東京から北海道まで諸国を流浪する旅を続けた。そして、東京に戻る途中、「青森の某禅寺より坊主の衣を貰ひ受け途中禅寺に立ち寄ては飢を凌ぎつゝ、徒歩」で帰京したという。漱石の話がこのような細部にまで及んでいたと断定は出来ないが、興味深いことは、「煩悶」の結果あてどなく「放浪」するしか術のない青年の境遇は、『春』の岸本が恋に煩悶し関西を放浪したこと、帰京後も苦悩は増すばかりで、ついには第三十八章において、僧形に身を変え再度漂泊の旅を勇躍して始めるくんだりと非常に類似していることである。

上田敏の送別会が開かれた時、藤村は翌明治四十一年の新春から『春』を連載する準備に余念がなかった。明治四十年十一月二十一日の神津猛宛書簡に「非常に多忙を極め（中略）筆とり居候。」と伝え、同日の「朝日新聞社」の洪川玄耳宛書簡^(注11)で新聞のコマ絵十六葉を一周毎に取替えるよう指示し、画家長原止水に「十二月十五日迄」と期限を切替作してもらうよう依頼していることから明らかである。当初の取決めどおり、元旦からの掲載に向けて着々と準備が整っていたようである。ところが、明治四十年十二月十日鈴木三重吉に宛てた漱石書簡によると「小生も三十日つゞきのものを只今たのまれた許りに候。小説と行ななくとも三十日はつゞける義務が出来候。」とあり、十一月二十五日の送別会から間もなく、遅くとも十二月十日の直前までに、藤村と朝日新聞社側との間で『春』の掲載を延期する交渉が行われ、その結果朝日新聞側は、急遽漱石に新作の執筆を依頼しなければならなくなったのである。

それが明治四十一年一月一日から四月六日まで連載された小説『坑夫』となったことは言うまでもない。なお、違約に近い掲載延期となった理由は、六月に発表された小説「並木」が、旧友馬場孤蝶等の反発を買い、九月モデル問題を惹起させていた事情のためである。

以上のように、送別会が開催された明治四十年十一月二十五日、『坑夫』のモデルになった青年の話の経緯は重大である。自分の青春期を粗上りのぼし始めていた藤村にとって、モデルの身の上話は、陳腐なゴシップ的話題では済まされなくなったのではないか。つまり、恋に煩悶したあげく放浪する青年の境遇は、自身の青春の旅との暗合において、強いインパクトを残したのではなからうか。『春』が刊行される際には削除されたが、新聞初出百二十四回には「恋の重荷を負って西は伊予から東は八戸までも流浪して歩いた岸本は、今、生活の重荷を負ひながら都会に流浪して居る。ロハ台を離れて、天神の境内から切通坂の方へ下りて行かうとする彼は、恰も一種の漂泊者のやうであつた。」とあり、岸本の一年余りの漂泊のイメージを、『春』後半部にまで及ぶ基調とする表現さえ見出されるのである。仙台へ赴任するまでの岸本をさすらしい人の苦悩として描いた新聞初出百二十四回の叙述は、『放浪記』の意図を殊更に強調しようとしたレトリックである。以上のことから、『坑夫』のモデルの話は、『春』が岸本に「何時が、そんなら、旅の終であるか」(一)と自問させる青春の〈放浪記〉を積極的に打ち出していく有力な触媒になったと推測することも許されるであろう。

じつは、藤村は明治四十一年から四十二年にかけて「放浪者」と題するエッセイを二編発表している。「放浪者」(『文章世界』明41・9)と「放浪者」(『文章世界』明42・4)である。前者によると、小説『春』

の執筆に多忙を極めていた明治四十一年七月頃、諸所を放浪している青年が訪ねて来て、自分の境遇が『春』の岸本と良く似ている事などを語ったと書かれている。エッセイ「放浪者」に出てくる青年は、小説『坑夫』のモデルになった人物とは異なる男性であつたらしいが、これも煩悶の解決に窮した青年の典型である。『春』が脱稿されたのは明治四十一年八月十七日、連載が終わつたのは二日後の十九日である。藤村は、脱稿後すぐさま上州の磯部へ発ち、信州の軽井沢を経由して佐久の神津猛宅まで足を延ばし、八月二十二日帰京する。九月二日の田山花袋宛書簡には、前掲「文章世界」に発表した「放浪者」について、「只今別封ハナシの筆記を御送申上候。旅よりの手紙をとの御注文なりしも、別に書くこともなき旅行なれば、今回はハナシだけにて御許し被下度候。」と返事している。花袋には八月二十日磯部から、同二十二日軽井沢からハガキを送っている。花袋には八月二十日帰京後、早速花袋から「旅よりの手紙」形式の原稿を頼まれたことになる。花袋からの執筆依頼は、さほど書くのに困難とも思われない旅行談であつた。にもかかわらず、藤村は、『春』執筆中に訪問して来た放浪者のことをわざわざ取り上げたと解釈できる。『春』を書き上げた直後、七月に放浪者が訪ねてきてその境遇・煩悶等をつぶさに語つた出来事が、藤村の心中に強い印象をとどめていたと推測できる。当然この放浪者の記憶は、自ずと明治四十年十一月二十五日上田敏の送別会の折り、漱石から聴いた青年の話にまで繋がっていたであろう。藤村には、『坑夫』のモデルの話が、『春』において青春の〈放浪記〉を書かせる有力な契機として作用したという自覚があつたので、『春』執筆中とその後、二度にわたって訪問した放浪者のことをエッセイに書き残すことになったのであろう。

(四)

前記文相の訓令は、就学の途上にありながら学生の本分を閑却して、たずらに煩悶する青年を、思想的に善導し国家の有為の人材に再編成しようともくろんでいた。この訓令の趣旨を『春』の岸本に重ねた場合、何が見えてくるであろうか。『春』の岸本は、女に恋々として、恩義ある恩人夫婦の期待に背き、無軌道な失踪をした青年である。訓令が厳しく指弾した学生の本文に背悖する墮落青年そのものである。

小説『春』における岸本の感溺・苦悶・放浪等の持続的な表現は、何を意図していたのか。恋愛によって岸本に起った『新生』の光景(五十二)は、結果として恩義ある人間関係を裏切り、孤独な漂泊者として放浪する苦渋をもたらした。『春』に登場する「進んで戦はうとする新しい時代の青年」(四十四)は、敗北していく青木の悲劇性を別格とするとして、その他の市川・菅等も、時世が制約する壁の前で「吾儕はすこし早く生れて来過ぎた」(八十)という悲痛感を一様に避けられなかった。その中でも岸本の混迷の深さは際立っているのである。同人が再会する『春』の冒頭から、岸本の無謀な出奔は仲間から「馬車馬」(二二)と揶揄され、よき理解者である青木からも、いささか「暴進の形だった」(四十四)とたしなめられるのである。青木が自殺した後、他の同人が青木の路線を深く見切り、青春の岐路を穩健なディレッタンチズムに選び終えたのに対して、「人情から受けた深傷を癒すものは人情より外に無かった」(百十一)岸本は、女の幻影に拘泥し続ける。終始岸本は進退極まった迷路の中に幽閉されているのである。菅等に「酔生夢死」(百八)する「空想家の末路」(同上)と憐れまれる所以である。

三好行雄氏^(註13)は、『春』の人物造型の中に青春を壮年の冷静な目によ

て再構築する「複眼」の機能を指摘したことがある。『春』を書く藤村が、日露戦後の煩悶する青年に時代精神の具現を見ようとした時、岸本の不安定な彷徨をこのような時代認識と関連づけて表現しようとしたのは想像に難くない。煩悶する青年の中に新時代を領導する指標的価値を見出そうとする藤村の意図から推し量ると、岸本を感溺家として描く造型法が、過度に増幅されていくのは必然であったのである。

じつは、このような岸本の青春の未確定状態は、青木から岸本への継承関係においても強調されている。作中、しばしば青木と岸本の内面の近似性が指摘される。そのことは、群像の中で岸本一人が「自分の先導者」(三十二)である青木に深く心酔する関係へ連動する。藤村が多くのエッセイで透谷の後を追って心の戦いを続けたと強調する自負心が、『春』の青木と岸本の関係性に多量に反映していることも贅言するまでもあるまい。ディレッタンチズムに逸脱した仲間に疎外感を深める岸本が、青木の路線の孤塁を守ろうとする只一人の有資格者として措定された構図は疑いを入れない。しかし、人生の「戦士」として戦い、「敗北者」として自死した青木に比して、「深傷を負って戦場の草の中に倒れ乍ら、まだそれでも抵抗する気で居る兵士」(百二十六)と表現されている岸本の闘い方が、旗幟不鮮明なことも明白である。『春』の後半部分の岸本像は、青木の路線の確固とした継承者というより、混迷の深さに終止符を打つことに困却しているの見るべきであろう。例えば、百六章には、房州小湊の日蓮の生地を訪ねた山道で、崖から谷川に路傍の石を落として、文芸の道かそれとも他の職業に向かうかについて「自分の一生の方向をトはうとした」が、結局どうしているか分からなかったと書かれている。その前途未定の不安の最中から、岸本は次のような確信に到達する。「自分は自分だけの道路を進みたいと思つて居た。自分等

の眼前には未だ／＼開拓されて居ない領分がある——広い潤い領分がある——青木はその一部分を開拓しようとして、未完成な事業を残して死んだ。斯の思想に励まされて、岸本は彼の播種者が骨を埋めた處に立つて、コツ／＼その事業を継続して見たいと思つた。」(百十二)小説『春』の考察において引き古された周知の箇所である。しかし、百十二章以降にも前途の方針が未確定な岸本の動搖は、執拗に繰り返されているのである。生活の重荷に苦しむ岸本が、婿養子の話に「誘惑」され心惑うくだりは、都合四章(百十二)百十四、百十七)に亘つて出てくる。養子縁組を恥ずべき屈従と思つていた岸本は、自尊と「誘惑」との間で揺れる優柔不断を自身の手で解決することが出来なかつた。仲介に動いた根自身が勤めるのを断念することで、岸本は「方向を誤まらなかつた」(百十七)に過ぎないのである。その後も、空想を追う岸本は陶器画工の見習いを始め(百十七)百十九)、学芸の世界、芸術の鑑賞に向かう連中の後を追つて大学専科に入学することを志望するくだり(百十七)が立てつづけに描かれている。「芸術は吾心を得たり」という絵にヒントを得た陶器画家が、青木の残した事業を開拓するものに相当するとも思えない。ましてや、「後れ馳せながらも友達の後を追はうとして、大学の選科に入る準備を始めたこともあつた。」(百十七)という岸本は、「播種者」を継承する重大な決意を放棄したに等しいのである。百十二章の決意の前後に露呈した「迷ひに迷つて居る岸本」(百十七)の姿は、人生行路の選択を誤りかねない危機の連続に直面していたことを如実に示している。いわば、『春』の岸本は、恋に「盲目」(十三)であつたばかりではなく、終始「自分を知ることの少い、言と唾と響とを兼ねたやうな青年」(百二十一)であるために、終始人生の方途をたずねあぐねて彷徨しなければならなかつたのである。『春』最終章が「何時来ると

も知れないやうな空想の世界を夢み」続ける岸本で締め括られたのも故なしとしないのである。

(五)

以上のような規範的な方向さえ見失いかけた岸本の惑いの深さを強調している『春』の表現世界は、煩悶する時代の青年に対する強い思い入れの反映として理解されなければならない。と同時に、『春』の表現意図については構想論的な観点から注目しなす必要があろう。別稿でも論じたことがあるが、『春』が構想されはじめる時、談話「吾が生涯の冬」(『中学世界』明40・3)において、個性の未分化な少年の時代が様々な試行錯誤を繰り返す矛盾撞着の「冬」のような様相を呈するのに對して、自己の確立に到達する青年期を「春」という語句で説明していた。当初『春』の腹案は、「生命の朝」(吉野臥城『痛快』序、明41・10)と規定する『若菜集』(春陽堂 明30・8) 体験を念頭において、岸本が『人生の春』に到達した青年」(『春』執筆中の談話)、「新思潮」(明40・10)として讃歌される予定調和的な結論を強く滲ませていた。『春』の執筆過程は、このような原構想に修正を加え、少年時代の「冬」の様相を青年時代まで延長し、慘憺たる苦境に呻吟する彷徨を描き込むことによつて、青春の理念的な把握を完成させたのである。

『春』百二十八章で、仙台に都落ちする岸本を送る送別会が不忍池畔で開かれる。散会し仲間と帰路につく岸本は、夜の景色を見ながら、〈青春〉という時期について、「長閑なやうであわたゞしい、楽しいやうで風雨の多い、努力の苦痛と浪費の悲哀とで満たされたやうな——若い、新しい、壮んな感想のする時節」という総括的な感慨に到達する。つま

り、作者は、「努力の苦痛と浪費の悲哀」の連続に悶えた岸本の〈青春〉という「時節」を、明暗交々に交錯する両義の様相として総括しようとしたのである。この表現の真意を理解する為には、翌年に発表された前記「文学断片」が参照されねばなるまい。「文学断片」は、前記『春』百二十八章の修辞を使用しながら、青春の理念的な把握を「新生の真相」として次のように明確化している。「真の慰藉なるものは寧ろ暗黒にして且つ惨憺たる分子を多く含まねばならぬ。新生の真相と云ふ様なものは、其の光景の多くは風波の多い努力の苦痛と、浪費の悲哀とに満たされたものかと思ふ。」「新生」の真实性を保証するものが、「苦痛」「悲哀」の真摯さを必須の要件とするという経験論が展開されているのである。「暗黒」にして「惨憺」たる状況を不可分にして成立する「新生の真相」という青春の理念的把握の深化は、小説『春』の中の煩悶や放浪等の表現に積極的な意味付与を行うことを可能にしたのである。

以上のことから、藤村が小説『春』以降の一連のエッセイにおいて、「新時代」意識を体现するが故に自己の実現の方途に苦しむ青年の煩悶や墮落等に対して、しばしば世代の差を越えて積極的な擁護者として発言し続けたことも説明出来よう。また、藤村の真意が青年の現状を手厳しく攻撃する世上の論調を大胆に否定し、そこに時代を画する新しい指標的な意義を見定めることにあることも明らかであろう。

注

- 1 尾形国治「アメリカ図書館留学記 3」(『図書新聞』昭51・9・4) は次のような英文の書き込みを紹介している。「"Haru" or "Spring." A story-a study of young Japanese life, their life, their love, t

heir dream, and their struggle, by To-son Shimazaki Tokyo. (1908)」なお、この文献の存在は、既に中島国彦氏の論文『自分』『自分等』そして『播種者』—藤村『春』の一節から—(『日本文学』昭52・6)が指摘していることを付記する。

2 「婦人の墮落について」は、「新古文林」の回答文を抄出して掲載したものの。部分的掲載となった理由は不明。

3 有島生馬「初期短篇について」(『藤村研究』第三号、『島崎藤村全集』第九卷附録、新潮社、昭24・1)

4 瀬沼茂樹『評伝島崎藤村』(筑摩書房 昭56・10)

5 明治三十九年九月三日付け吉江喬松宛国木田独歩書簡参照。同書簡中で独歩は、「新古文林」十月号の「呼物」に前記アンケートの特集を挙げ、窪田空穂を担当者にして「十分多量に材料を集め」るよう吉江喬松に指示を出している。なお、上記の回答を集めた特集は、明治三十九年十月号から十二月号の三ヶ月に亘っている。

6 武林無想庵「新片町時代の思出から」(『藤村研究』第九号、『島崎藤村全集』第十卷附録、新潮社、昭25・1)によると、藤村は武林に新片町の自宅の二階で、木村荘太・大貫晶川を「ヤンガー・ゼネレーションです。」と言って紹介したと記している。この言葉は、藤村が若い世代に寄せる期待と同情をよく伝える。

7 神津猛遺稿集『後凋』(私家版 昭42・7)所収のエッセイ「俳句と自分(付、生立の記)」に「家の業からして、農村問題とか地方改良とかいう方面に専心した。日露戦後の地方改良の声に引きよせられて、その昔自分の家が二宮尊徳翁の仕法を受ける関係にあった因縁もあり、又、飯島幾太郎氏の報徳宣伝に共鳴して、報徳会の運動に熱中した。」とある。なお、北信の報徳社の活動状況を伝えた「斯民」第

- 一篇第二号所収の「北信の報徳事業」は、江守五夫『日本村落社会の構造』(弘文堂 昭51・9)の「補章 明治期の報徳社運動の史的展開」の指摘によって知り得たことを付記する。
- 8 宮地正人『日露戦後政治史の研究』(東京大学出版会 1973・10)の第5節「地方改良運動と報徳社」参照。なお、宮地氏によると、報徳会は明治四十一年以降内務省の主導の下に政治的スローガンを推進する思想団体としての性格を鮮明にした以降の名称であり、それ以前の報徳社とは区別されている。
- 9 「年譜」(『定本上田敏全集』第十巻、教育出版センター 昭56・10)
- 10 青柳達雄「漱石『坑夫』の材源」(『言語と文芸』一〇〇 昭61・12)
- 11 モデルの相手が師範学校の女子学生であったと伝える「東京日日新聞」記事の内容は、夏目鏡子が『漱石の思ひ出』(角川文庫 昭41・3)の中で述べている証言と一致している。
- 12 中島国彦氏が『春』への道―成立過程とモチーフをめぐる―(『日本文学』昭52・9)で指摘しているように、筑摩書房版全集が書簡の書かれたのを明治四十一年としているのは、明治四十年の誤りである。
- 13 三好行雄「複眼について―『春』のための補遺」(『島崎藤村論』所収、筑摩書房 昭59・1)
- 14 拙稿『春』の意図(『近代文学論集』2、昭51・12)参照。
- 15 「文学断片」は口述筆記の文章であるが、藤村の校閲を経ている旨の付記があるので問題はあまい。なお、上記の文章に酷似する資料に「牧師の言葉」「新生」(いずれも『新片町より』所収)がある。